

通度寺戒壇七星神像の考察

李 鎮 榮

〈提要〉

7 世紀創建の通度寺戒壇，根據修理記錄被認為是 16 世紀末受損，17 世紀以後再重建的。但是，這個戒壇的哪個部分受損，又是怎樣被修復的尚未明確。然而，通度寺戒壇中七星神（二十八宿）填滿了基壇四面，這被認為是掌握着與戒壇年代相關的鑰匙。雖尚無法確認這七星神的修理記錄，但圖像和樣式與高麗和朝鮮時代的修理方式有很大的不同，和統一新羅石塔的八部眾等樣式却有很多共同點，所以設想可以追溯到統一新羅的時代。

はじめに

韓国の梁山・通度寺戒壇は、新羅（前 58～676）の慈藏（590～658）が入唐し、中国から帰国した際にもたらした仏舎利を安置すべく、646 年に創建した韓半島最初の戒壇である。同戒壇は、唐僧道宣（596～667）が 667 年に完成した『戒壇図経』に先立つものの、構造と法量の面で同経と共通する点が多いことから、同経を基礎とすることに異見はないようである¹⁾。



図 1 通度寺戒壇 646 年建立（朝鮮時代修理）石造 筆者撮影

石造の同戒壇は『戒壇図経』に基づいて、中央の舎利塔を中心に正方形（下層基壇幅 990cm 高 97cm）基壇四面に、7 体ずつ計 28 体の七星神を、上層基壇にも繰り返して計 56 体（上層基

壇は数体ずつ欠ける)配置していた²⁾。また、上層基壇四隅にあった四天王と、現在も下層基壇四隅にある4体の守護尊、下層基壇四面5ヶ所の階段(現在は如来座像5体)に配置していた金剛力士10体などを合わせて、計74体以上の守護尊を配置していた³⁾。このように基壇を中心に守護尊を配置する構造は、石塔を中心とする統一新羅時代(676~935)の仏塔と同様であり、『戒壇図経』で述べるように、道宣は「仏舎利を安置した戒壇は仏塔である」と規定する。すなわち、戒壇と仏塔は舎利を擁護する諸守護尊を配置した正方形基壇上に舎利を安置する共通点から、石造の通度寺戒壇は石塔であるとわかる。ただし、韓国においては、仏塔基壇に70体以上に及ぶ巨大な守護尊を配置した集合体は、この他には通度寺戒壇に基づいた、高麗時代(918~1392)の金山寺戒壇のみである。このように、通度寺戒壇は守護尊を配置した韓国の石塔としては現存最古作で、同構造の基壇に守護尊を配する、後の統一新羅仏塔に大きく影響したと考えられる重要な作例である。

ところが、これまで7世紀創建の同戒壇は後世の資料に従って、朝鮮時代(1392~1910)の16世紀末の壬辰倭乱(文祿の役)による被害後である、17世紀以降の後補(再建)とされてきた。しかし、戒壇全体が朝鮮時代の後補であるか否かに関する先行研究は充分とは言えず、守護尊の様式と年代について一部言及されているのみである⁴⁾。このような現状で、上下基壇を埋め尽くしている計56体の七星神は、年代に関する最も大きな鍵を握っていると見られる。このことから本稿では、調査が不十分な上層基壇を除いて、下層基壇の七星神を取り上げて、年代について検討していきたい。

1. 被害と修理

文献史料によると、通度寺戒壇の最初の被害は、高麗末である14世紀後半にあったと確認できる。高麗の李穡(1328~1396)が記した『通度寺釋迦如來舎利之記』には、洪武十年(1377)と十二年(1379)の倭賊による戒壇の中心である舎利が安置された舎利塔の被害の記録が残されている⁵⁾。ただし、同内容から考えると修理が想定されるが⁶⁾、それについて直接言及しない点に留意される。

朝鮮時代の1603年の「普賢寺釋迦舎利碑」には、1592年の戦乱時に、通度寺戒壇の舎利を狙っていた倭敵による被害があったが、四溟(松雲)大師惟政(1544~1610)が戒壇を本来の姿に戻したとある。彼は敵から再度の被害を憂慮し、舎利容器(舎利塔にあった)二函を金剛山の病老(西山大師休靜, 1520~1604)に送った。休靜は金剛山も敵からの被害を受けることを想定し、一函は再び通度寺戒壇に戻し、残りは太白山に浮函(仏塔)を建立してそこに安置させたとする⁷⁾。

1603年の修理記録である「萬曆癸卯重修記」(1705年)には、倭敵によって盗まれた舎利を、敵の捕虜となった玉白居易が取り戻し、儀臺大師が敬峇に命じてこの舎利を再び舎利塔に奉安して修理したとする⁸⁾。

1705年の修理記録である「康熙乙酉重修記」に、「又以蓋石覆之四面上下三級七星分坐四方四

隅八部列立上方蓮華石以石鐘冠之耳⁹⁾』とある。この記録からは、一見すると戒壇の上下基壇の七星神と四隅の八部（守護尊）を再建したように見える。しかし、よく考えると、七星神と四隅の守護尊が並んでいる基壇を石で覆った修理をしたと受け取ることもできる。

1706年の「梁山通度寺舍利塔碑」にも、上記と同様に14世紀の洪武年間と1592年の被害が記されている。また、順治年間（1644～1661）に浄仁大師と、康熙乙酉年（1705）に性能大師が舍利塔と戒壇を修理したことが記録されている¹⁰⁾。

他にも被害の記録はいくつかあるが、いずれも16世紀末の被害の延長線上にあるもので、少なくとも七星神に関して上記以上に詳細な内容はほぼない。ただし、当初あった下層基壇四面の5ヶ所の階段は、19世紀に現存の5か所の如来座像に代わったという指摘があった¹¹⁾。

以上のように、1592年の戦乱による1603年からの修理が窺えるが、どの部分をどのように修理したかについて不明な点が多い。ところが、石塔である通度寺戒壇の16世紀末の被害時の敵の狙いは、戒壇最上部の舍利塔内の舍利莊嚴具であり、先述のように下層基壇には舍利塔まで容易に登れる階段が設置されていた。つまり、七星神が配された下層基壇は比較的、被害を受け難い場所である。さらに、七星神を刻む部材は、幅60～110cm高68cm程度で石塔の部材としては大型のものである。同規模の石塔部材は、通度寺戒壇の創建年代に近い統一新羅の石塔基壇や王陵に最も多く、このような部材の奥行（厚み）は少なくとも30cmから100cm以上のものもある。統一新羅石塔は千年以上に及ぶ老朽化により倒壊したものも多いが、守護尊を配置した基壇は、全体を支える大型の頑丈な部材であるため、比較的当初の完形のまま保存されてきた。仮に下層基壇が被害に遭ったとすれば、この部分は全体を支える最下段部であるため、戒壇全体を立て直すこととなる。朝鮮時代には仏教石造美術が大きく衰退したことを勘案すると、大型石材で28面の七星神を浮彫して全体を再建したとは想像し難いところがある。このように、上記史料のみで七星神が1603年以降に再建されたものとは断言できない。

2. 七星神の現状

通度寺戒壇は先述のように『戒壇図経』に基づいており、同経には第2層に配置する四天王と、その眷属である八部衆の神名が挙げられている。さらに、同経にはこれらの守護尊は夜叉であり、その体は青黒色で目は赤で、牙を出しながら髪の毛は逆立たせ、口から火を出すとする¹²⁾。また、四天王の眷属として東西南北を守護する七星神（の神名）が列挙されている¹³⁾。

一方、同経では「今前列護佛塔神名。多出華嚴灌頂孔雀王賢愚大集大智論等¹⁴⁾」とし、この經典で取り上げる七星神を含めた守護尊（護仏塔神）を、『大集経』などを典拠にしたとする。実際に『大集経』には、東方「角宿 亢宿 氏宿 房宿 心宿 尾宿 箕宿」、西方「奎宿 婁宿 胃宿 昴宿 畢宿 觜宿 參宿」、南方「井宿 鬼宿 柳宿 星宿 張宿 翼宿 軫宿」、北方「斗宿 牛宿 女宿 虚宿 危宿 室宿 壁宿¹⁵⁾」とする七星神の漢訳名で挙げている。また、『大集経』は「四天下四王及眷属亦復能護持二十八宿等及以十二辰。（中略）四大天王。阿修羅王。龍王。夜叉王。羅刹王。乾闥婆王。緊那羅王。迦樓羅王。摩睺羅伽王¹⁶⁾」と述べ、二十八宿（七

星神)と同じく方角を司る十二辰(十二支)及び、八部衆を四天王の眷属とする。このように、通度寺七星神は『大集経』を典拠とする『戒壇図经』に基づいて、かつて第2層に配されていた四天王¹⁷⁾の眷属として基壇に配された、夜叉形の尊格だとわかる。

通度寺七星神は、幅60~110cm高68cmの正方形あるいは長方形の基壇面石に高5~7cm程度で浮彫される。また、その上部を覆う石材のほとんどは、色と石質が七星神とは異なることから新部材であることがわかる。七星神は下半身のみ着衣し、上半身は裸形であり、胡坐をかくか片足を立てて隆起する雲座に座す。また、左右に翻る天衣は、頭部周辺を光背のように取り囲む。首と腕には飾りをつける像も確認でき、頭部に被った筋が多く入った布製のような帽子は、インドの原始的な夜叉などが被るターバンや、その影響を受けた中国の守護尊を彷彿させる。鋭くつりあがった目を大きく開き、口を固く閉じ、相手を威嚇する守護尊の表情である。足には明確に鞆を着用した像が含まれ、その他の像もはっきりと表現した手の指に対し、足の指が見えないことから、いずれも鞆を着用しているとわかる(図2~図5)。では、基壇四面の東西南北の順番で

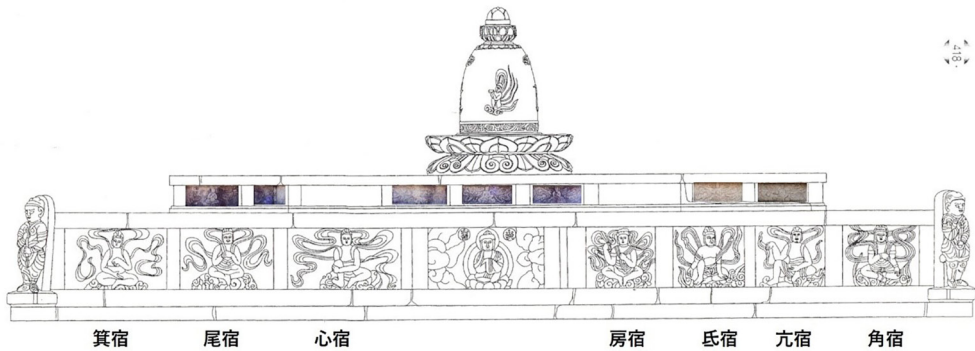


図2-1 東面下層基壇の七星神配置図(通度寺『通度寺大雄殿呬舎利塔実測調査報告書』1997)



図2-2 東面七星神 筆者撮影

特に目立つ七星神を詳細に述べていきたい。

東面は、中央の如来座像を挟んで両側に七星神を配置する（図2-1）。他の面より比較的高い雲座を有し（図2-2）、房宿・氏宿・角宿の渦巻く雲の両先端が高く隆起していることがよく確認でき、豊富な肉付きとしなやかな体が目立つ。また、角宿と房宿は腕や首に飾りがついており、箕宿は7体の中で最も目立つターバンのような帽子を被る。そして、心宿と氏宿は片足を立て、亢宿は右足を雲座に降ろして座す。房宿は両足裏を合わせてV字型に降ろし、その他は胡坐をかいて座す。角宿は足首までの鞆を履いており、尾宿は合掌に近い手の印相をし、他は手で様々な仕草をする。七星神を刻む部材は、七星神の上下（頭部の天衣や雲座）や左右（天衣）が寸断されていることから、切り取られたことがあると判断できる。箕宿・尾宿・心宿と同様に左右が切断されていない角宿は正方形（幅80cm高70cm）に近い。特に、七星神とそれを覆う色と石質が異なる新部材は噛み合わず、大きい隙間が目立ち、心宿と亢宿は経年劣化による剥落が激し

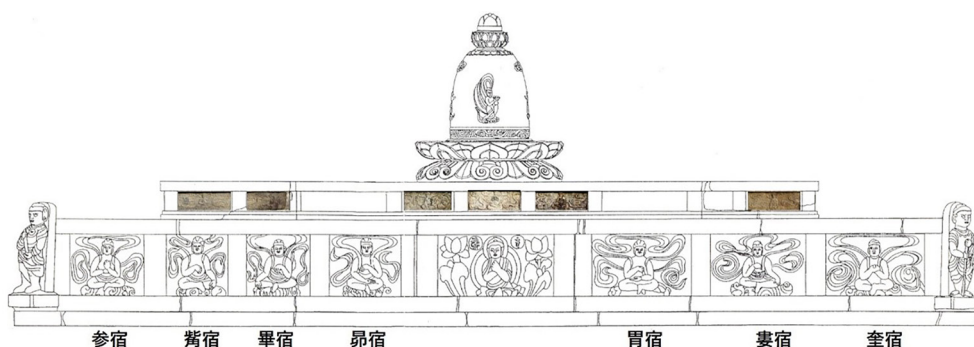


図3-1 西面下層基壇の七星神配置図（通度寺『通度寺大雄殿毘舍利塔実測調査報告書』1997）



図3-2 西面七星神 筆者撮影

い。

西面は、中央の如来座像を挟んで左右に七星神を配置する（図3-1）。7体は単純な蕨形の雲に胡坐をかいて座り、合掌する奎宿以外は両手で様々な印相をとり、ターバンのような帽子を被っていることがよく確認できる（図3-2）。また、大振りに表現されている胃宿の目鼻や、畢宿の蝶形に尖った耳はインドの原始的な夜叉を連想させ、畢宿の「凹」型の帽子は、28体のうち、唯一の文官風の冠である。胃宿・婁宿・奎宿の剥落は激しく、七星神を刻む部材は左右の切断はないが、上下が切り取られた痕がみられる。さらに、部材上部の新部材との間には隙間が多い。長方形の胃宿・婁宿・奎宿以外の、昴宿（幅76cm高68cm）・畢宿（幅68cm高68cm）・觜宿（幅68cm高68cm）・参宿（幅80cm高68cm）はほぼ正方形である。

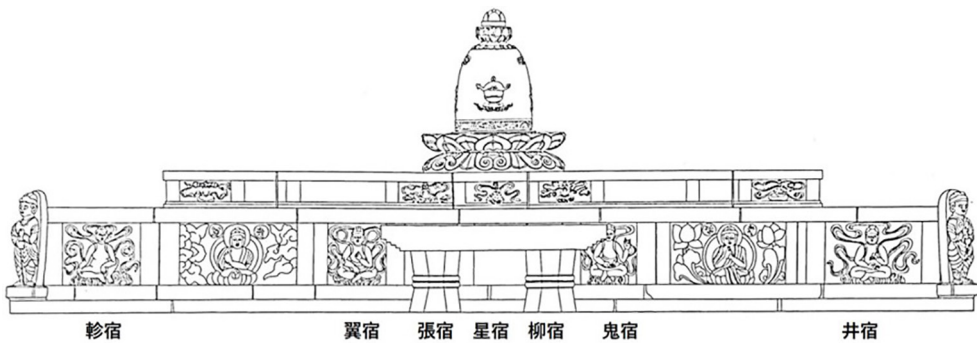


図4-1 南面下層基壇の七星神配置図（通度寺『通度寺大雄殿呉舎利塔実測調査報告書』1997）



図4-2 南面七星神 筆者撮影

南面は、2体の如来座像を挟んでその両側に七星神を配置する（図4-1）。中央の三体（張宿・星宿・柳宿）は拝礼石で隠れており、軫宿・張宿・柳宿は左脚を立てて座る（図4-2）。柳宿は両手の指先を合わせる阿弥陀の転法輪印のような独特な印相をとり、右手で左手を抱える星宿以外は両手で様々な印相をとる。軫宿は東面角宿のように円形を描く天衣が流麗に広がり、鬼宿の第3・4指を折り曲げた左手は関節まで表現している。七星神を刻む部材は上下が切断された痕があり、それを覆う新材材とは組み合わせが不自然で隙間が多いことが確認できる。長方形の井宿（幅104cm高68cm）以外の、軫宿（幅80cm高68cm）・翼宿（幅64cm高68cm）、中央の張宿・星宿・柳宿（拝礼石で隠れて測定不可だが正方形比率）及び、鬼宿（幅60cm高68cm）はほぼ正方形である。

北面は、中央の如来座像を挟んでその両側に七星神を配置する（図5-1）。室宿は首と腕に飾りをつけて足には轆を履き、斜めに上げる左手は第1・5指を合わせる独特な印相をとる（図5-2）。壁宿と危宿は左脚を立てて座り、他は胡坐をかき、牛宿は膝に降ろした左手と斜めに曲げ

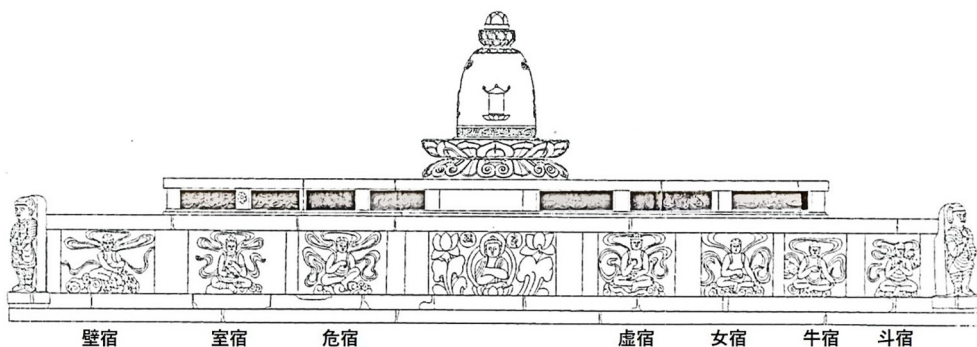


図5-1 北面下層基壇の七星神配置図（通度寺『通度寺大雄殿毘舍利塔実測調査報告書』1997）



図5-2 北面七星神 筆者撮影

た右手の間に棒状のものが見える。牛宿と斗宿は経年劣化による剥落が激しく、七星神を浮彫する部材の左右や上下を切り取っており、部材とそれを覆う新部材が噛み合わない様子が目立つ。ただし、長方形の壁宿・室宿・危宿以外は、切断された痕跡はあるものの現状では正方形に近い。

このように、七星神を刻んだ部材は、いずれも左右の天衣や上下の頭部を囲む天衣と雲座が寸断されていることから、切り取られたことが明確である。特に、七星神の部材とそれを覆う部材は、色と石質が異なる新部材であり噛み合わないため隙間が多い。ところが、先述の1705年の『康熙乙酉重修記』には、「戒壇周圍四面皆四十尺¹⁸⁾」で基壇幅が約12mであるとし、通度寺戒壇に基づいている後述の金山寺戒壇も基壇幅は12mである。すなわち、現在の基壇幅が990cmであることは、七星神を刻む各部材が17世紀以降の修理時に切り取られたためと考えられる。また、現在高68cm程度の部材上下も切り取られたことは明確だが、通度寺戒壇の影響が指摘される、679年建立の四天王寺の塔基壇の守護尊が高90cmであることから¹⁹⁾、本来の通度寺七星神の部材はより高いものと考えられる。

このように、七星神を刻む部材が新部材であるならば、上下左右を切断した痕は残らないため、現存の七星神は八部（四隅の守護尊）とともに、16世紀末の被害以前のものであることは間違いない。また、経年劣化による剥落も、後述する17世紀以降の作例にはほぼ目立たないことから、これを裏付ける。つまり、先述の『康熙乙酉重修記』の「又以蓋石覆之四面上下三級七星分坐四方四隅八部列立」は、七星神と八部（四隅の守護尊）の修理ではなく、彼らが並ぶ基壇を新部材で覆ったことであることが判明する。



図6 下層基壇四隅の守護尊『戒壇図経』による神名 筆者撮影

通度寺七星神の特徴は、『戒壇図経』によって神名が特定できる同戒壇四隅に配置された4体の守護尊である東南「跋闍羅波尼」、西北「金毘羅」、西南「婆里早」、東北「散脂」からも確認

できる²⁰⁾(図6)。彼らはいずれも高100cmで、剣や金剛杵を持つ武装した立像である点においては七星神と異なる。しかし、4体の守護尊はいずれも下半身の衣が強調され、東北像以外はターバンのようなものを被り、西南の婆里早以外は轆を履く。また、彼らの目を大きく開きながら口を固く閉じた表情は、相手を威嚇する夜叉の顔立ちで、上半身裸形の東南の跋闍羅波尼や西南の婆里早は首に飾りをつける。4体は持物を持つ姿勢をとり、左手を上にして(西南婆里早は右手を上)両手で持物をとる仕草は、七星神の西面冒宿や昴宿と共通する。この4体は、七星神と共通点が多いことから、改めて四天王の眷属の夜叉(形)であること、そして、同年代であることが想定できる。4体の年代については、14世紀末の被害後の修理を想定して同時期の後補とする見解と²¹⁾、西南の婆里早を、6~7世紀の中国の夜叉形の守護尊に近い様式とする見解とがある²²⁾。すなわち、もし通度寺七星神が四体の守護尊と同年代のものであれば、14世紀以前に遡る可能性も充分にあると考えられる。

3. 朝鮮時代の七星神



図7 七星神(二十八宿のうち) 16世紀(朝鮮時代) 高麗美術館蔵 絹本彩色
(高麗美術館『高麗美術館蔵品図録』2003)

朝鮮時代の七星神には、熾盛光仏如来図に描写されたボストン美術館(14~15世紀)や高麗美術館(16世紀、図7)の作例があり、両作品はともに北斗七星と東西南北の七星神である二十八宿を同様の文官風で表す。このような図像は、後述する高麗末の敬天寺址石塔(14世紀)における北斗七星の図像と同様で、前時代の高麗の図像を継承したことがわかる。他の朝鮮時代の作例における七星神も、これに類似する図像が多く、通度寺七星神とはかけ離れている。当時は、仏教石造美術が顕著に衰退したため、通度寺戒壇のような70体以上の大規模な守護尊の集合体はほぼ例を見ない。

通度寺七星神が朝鮮時代の17世紀以降の後補であるか否かを知る手掛かりは、1673年建立の大邱・龍淵寺戒壇(図8-1)にある。同戒壇の創建を物語る「龍淵寺釈迦如来浮屠碑」(1676年)の、「二函に二顆ずつ」安置されていた通度寺戒壇の舍利が、1592年の倭敵による被害の後に、そのうちの一函(舍利)は太白山の普賢寺に奉安され、残りの一函(舍利)は通度寺戒壇の改修後再び安置させた内容は先述の史料と同様である。ところが、当碑文では再び通度寺戒壇に

舍利を安置する過程で、一函に安置された舍利二顆のうち一顆を安置すべく、1673年に毘瑟山龍淵寺に戒壇を建立したという²³⁾。すなわち、通度寺戒壇の舍利を分けて（分舍利）安置する目的で、17世紀後半に開いた龍淵寺戒壇は、龍淵寺戒壇と近い年代に修理された通度寺戒壇との必然的な関わりが窺える。さらに、龍淵寺戒壇（上層基壇幅325cm 下層基壇幅505cm）は通度寺戒壇よりは遥かに小規模だが、四隅に配置した4体の守護尊と、基壇四面に守護尊を配置する石造正方形二重基壇上に、鐘形舍利塔を置く点は、通度寺戒壇を基礎とするものである。



図8-1 龍淵寺戒壇 1673年 大邱 石造 筆者撮影



図8-2 龍淵寺戒壇基壇の守護尊 崔淳赫氏提供



図 8-3 龍淵寺戒壇四隅の守護尊 (①~④)
 (www.donghwasa.net/?c=7/268/237&uid=2575&PHPESSID)

基壇四面には尊格は不明だが、守護尊が各2体ずつ計8体配される(図8-2)。ターバンのようなものを被り、天衣をまといながら雲座に座す彼らの姿は、通度寺七星神の図像を踏襲していることがわかる。しかし、龍淵寺戒壇の像は、武器などを持つ武装した立像で、雲の両先端が勢いよく隆起する比較的高い雲座に下半身が埋まり、像と一体になった天衣は単純に胴部に巻くのみである。さらに、全身に鎧などの衣を着用しており、大きく示した頭部と短い手足の表現は、通度寺七星神とは大きく異なる。また、四隅に配された4体は、通度寺戒壇四隅の守護尊のように、鎧などをつける武人形である(図8-3)。しかしながら、龍淵寺戒壇の4体は、蓮華紋などが表現される宝冠や、全身の衣が鎧のかんりの面積を覆う。また、基壇の守護尊と同様に、丸くて大きい頭部や手足が短い身体比率は、典型的な朝鮮後期の様式であり、通度寺七星神とも異なる²⁴⁾。

このように、建立事情と構造で通度寺戒壇と深い関わりを持つにも関わらず、龍淵寺戒壇の基壇と四隅の守護尊は、『戒壇図経』に従って7世紀の創建当初の大きな規模を保つ通度寺戒壇の七星神とは一線を画す。さらに、17世紀の龍淵寺戒壇では、通度寺七星神に比べると経年劣化による剥落がほぼなく、いずれも建立当初の部材であるため部材間の不自然な組み合わせは確認できない。

4. 高麗時代の七星神



図 9 金山寺戒壇の七星神 10世紀? 石造 筆者撮影

高麗における戒壇には、構造と法量において通度寺戒壇に基づいている、10世紀頃とされる金堤・金山寺戒壇がある²⁵⁾(図9)。同戒壇にも、通度寺七星神のように上半身裸形の七星神が胡坐をかいて座し、天衣を翻しながら合掌などの様々な印相をとる像が、上下基壇を合わせて56体以上配される。しかし、金山寺戒壇の七星神は、菩薩のような髪と首や腕の装身具が目立ち、ふくよかな体つきである。大ぶりで太く表した天衣は、一律に頭部を円形で囲んで完全に左右対称をなし、像全体を包むようにして部材全体を埋め尽くす。また、雲は雲座というより左右で七星神を取り囲むように隆起している。これらは1.5cm程度で非常に浅く浮彫される。これに対し、通度寺七星神は、5~7cmで高く浮彫されるなど、金山寺戒壇の七星神とは異なる年代とも言える。

また、高麗の戒壇として、951年創建の開城・仏日寺戒壇があり、構造と法量から『戒壇図経』や通度寺戒壇の影響をうけたと考えられる。同戒壇にも基壇に七星神のような守護尊の配置が知られ、現在は水没しているため確認できないものの²⁶⁾、水没以前の調査資料には下層基壇四隅に配された創建当初の守護尊4体が確認できる²⁷⁾。これらには上半身裸形の像が含まれ、両手の仕草が、先の龍淵寺戒壇よりは、通度寺戒壇の四隅の守護尊や七星神に近いことが注目される。



図10 敬天寺址石塔の熾盛光仏如来図 1348年 石造
(www.beopbo.com/news/articleView.html?idxno=101299)

通度寺戒壇は先述のように、高麗末の1377年と1379年に被害記録があり、その修理は確認できないものの、その可能性としては十分に考えられる。14世紀の作例として1348年に建立された敬天寺址石塔に注目すると、同塔の浮彫には熾盛光仏如来図がある(図10)。中央の牛車に乗る主尊と左右の菩薩とともに、その下には北斗七星が位置する。彼らは笏を両手に持ちながら冠を被り、文官風の服装に身を包む。これを継承した先述の朝鮮時代の熾盛光仏如来図でも、二十八宿(七星神)は北斗七星と同様に表現されたことから、敬天寺址石塔では空間の制約上表現されなかった七星神は、北斗七星と同様の姿であったと推察できる。

5. 統一新羅の様式

通度寺七星神のように様々な姿勢で座す夜叉風の図像は、例えば北涼時代の馬徳恵石塔（426年）²⁸⁾のような中国の初期仏塔や、それ以降の石窟などに起源が求められる。その後、東アジアにおける7世紀後半以降の守護尊の中では、奈良・薬師寺本尊の台座にある12体の夜叉が独特な印相を取りながら、片足を立てて座る原始的なインド風の夜叉であることが確認できる。さらに、西安・法門寺地宮から出土した、景龍2年（708）作の舍利塔（漢白玉霊帳）の基壇にも、胡坐や片足を立てて座る上半身裸形の守護尊が配される。7世紀半ばに創建された通度寺戒壇の七星神は、このように統一新羅時代に該当する7世紀後半以降も東アジアで流行した、夜叉風の守護尊との共通点が認められる²⁹⁾。ただし、統一新羅には他に七星神と確認できる図像は現存しない。

通度寺七星神は、先述のように上下基壇に同様の図像を繰り返して配置する。同様の規範は、『戒壇図経』や通度寺戒壇の影響が指摘される、679年に創建された慶州・四天王寺の守護尊にも見られる³⁰⁾（図11）。四天王寺の守護尊は着甲し武器を持って邪鬼に跨る図像で、一見通度寺七星神とは異なる。しかし、彼らの上部とアーチ型の内部に示した雲や、B・C像のように煩雑に天衣を翻しながら、片脚を立てて座る邪鬼（B像）の様子は通度寺七星神と共通する。



図11 四天王寺塔基壇の塑造守護尊 679年 幅70cm 高90cm 国立慶州博物館蔵 筆者撮影

特に、通度寺七星神の東面氏宿（片脚を立てて座り両手を降ろす）と房宿（両脚をV型に降ろす）は、四天王寺のA・B像に類似する。また、右脚を降ろして座す東面亢宿は、C像（右脚を降ろして左脚をそれに乗せる）に近い。さらに、四天王寺の守護尊は、幅70cm 高90cmの異なる3体を8回繰り返して計24体を配する。7世紀創建の仏塔である通度寺戒壇の基壇には、幅68~80cm（左右が切断されていない完形）高68cmの28体が配される。このように、通度寺七星神は、創建年代や法量及び図像、配置方式と数において、四天王寺の守護尊と多くの共通点が認められる。

7世紀の基壇に守護尊を配置する事例には、682年創建の慶州・感恩寺址塔から発見された舍利容器がある。守護尊を配置した正方形基壇上に舍利塔を立てる同舍利容器は、『戒壇図経』や通度寺戒壇に近い戒壇型である³¹⁾。通度寺戒壇の七星神が、創建年代の近い作例である同舍利容器のように基壇に守護尊を配置した点が注目される。



図12 大和寺十二支舍利塔（7世紀末以降）の十二支の描き起こし図
（蔚山博物館『蔚山博物館特選遺物歴史編古代1』2015）

他に注目されるものには蔚山の和寺十二支舍利塔がある。この舍利塔は通度寺戒壇と同様に、7世紀半ばに慈蔵によって創建された大和寺があった蔚山から出土され、通度寺戒壇とは近距離にある。同舍利塔の構造と法量は、通度寺戒壇の舍利塔と共通点が多いことから、『戒壇図経』や通度寺戒壇の影響を受けた、7世紀末以降の戒壇舍利塔であると指摘される³²⁾。この舍利塔にある獣頭人身の十二支像は立像で、通度寺七星神のように下半身のみ着衣し、寅・戌・亥を除いて持物をもたず雲座に立ち³³⁾、様々な印相をとる夜叉風の図像である（図12）。通度寺七星神と比較すると、合掌する南面奎宿などは丑（北）・辰（東）と共通し、右手を上にして両手で何かを抱える西面胃宿などは、寅（東）・卯（東）と共通する。片手を上げて案内するような仕草の東面房宿、亢宿は、子（北）・巳（南）・申（西）と共通する。そして、両手を逆V字型にする南面柳宿と西面參宿は、未（南）や酉（西）に近い。このように、通度寺戒壇と大和寺十二支舍利塔は至近距離に位置し、創建事情においても深い関わりを持つ。特に、それぞれの七星神と十二支はともに、四天王の眷属として方角を司る守護尊であり、同様の姿勢が確認できるなど、両者に様々な共通点が認められることは興味深い。

他にも通度寺七星神に類似する統一新羅の十二支像は、『戒壇図経』や通度寺戒壇の影響が指摘される遠願寺址石塔³⁴⁾や王陵護石においても、胡坐や片脚を立てる座制や、様々な印相をとる像が確認できる。また、これらの図像は、十二支や十二神将との関わりがあると指摘された、両脚をV字型にした、あるいは片脚を立てて雲座に座す、国立慶州博物館の石塔基壇面石に浮彫された3体にも確認できる³⁵⁾。

通度寺七星神は、幅68～80cm（左右が切断されていない完形）高68cmの基壇面石に5～7cm程度の高さで浮彫され、天衣を翻しながら様々な印相と座制で雲座に座するという点が最大の特徴である。これに最も近い図像は、同じく舍利を安置する石塔として、同規模の基壇面石に八部衆を中心に高さ4～10cm程度に浮彫した統一新羅石塔に見られる。統一新羅の最も早い八部衆である、8世紀の慶州・昌林寺址の八部衆は、幅110cm高110cm程度の正方形部材に浮彫される。

表 通度寺七星神と統一新羅石塔の八部衆（尊格不明の像は「八部衆」とする） 筆者撮影

			
東面尾宿	東面房宿	東面亢宿	西面奎宿
			
仁容寺址 夜叉	雲門寺 摩睺羅伽	崇福寺址 摩睺羅伽	陳田寺址 阿修羅
			
西面胃宿	南面軫宿	南面柳宿	北面室宿
			
仁容寺址 八部衆	雲門寺 八部衆	慶州出土 迦楼羅	陳田寺址 夜叉

先述のように、通度寺七星神を浮彫する部材には、左右が切断されていない正方形も多いことから、統一新羅の方式に近いと言える。では、通度寺七星神と八部衆の図像を比較してみよう(表)。

東面尾宿は、胡坐をかいて両手を合掌のように合わせており、両手をV字型にし珠数を取りながら胡坐をかく仁容寺址石塔の夜叉に類似する。両足の裏を合わせて両脚をV字型に降ろす東面房宿は、両手は異なるが雲門寺石塔の摩睺羅伽の座制とほぼ同様で、両者はともに円形をな

す天衣をまと。右脚を雲座下まで降ろして座す東面宧宿は、手は異なるが同じ座制をとる崇福寺址石塔の摩睺羅伽に類似する。

西面奎宿などの胡坐をかいて合掌するもの（合掌もしくはそれに近い仕草をするもの）は、例えば陳田寺址の阿修羅など統一新羅の八部衆に多く見える。また、胡坐をかいて右手を上にして両手で何かを抱えるような姿勢の西面胃宿は、仁容寺址石塔の八部衆とほぼ同様である。南面軫宿は、左脚を立てて座りながら両手をそれぞれの下半身に降ろし、左右で円形を描く天衣をまと。これは、両手はやや異なるが左手を立てて座り、円形をなす天衣を有する雲門寺八部衆に近い。南面柳宿は左手の甲を表にして、手のひらを見せる右手と印を結びながら、片脚を立てて座る。これは、片脚を立てて座り両手で同様の印相をとる慶州出土の迦樓羅に近い。胡坐をかいて左手を上にして両手で何かを抱えるような姿勢の北面室宿は、同様の両手で珠数を抱えて胡坐をかく陳田寺址石塔の夜叉に近い。

このように通度寺七星神は、ほとんどが胡坐か片脚を立てて雲座に座り、統一新羅石塔の八部衆も胡坐か片脚を立てて雲座に座す姿勢に限定される。すなわち、通度寺七星神の図像は、統一新羅の八部衆においても、最も一般的なものである。通度寺七星神は、石塔基壇において八部衆とともに方角を司る四天王の眷属として、統一新羅石塔の八部衆と多くの共通点が認められたことから、統一新羅に遡る図像である可能性が十分に考えられる。仮に、統一新羅以降の後補であるとしても、同時代の図像と様式を踏襲していることは間違いないと考えられる。

結論

以上、本稿は7世紀に創建された通度寺戒壇の七星神について検討してきた。通度寺戒壇は従来、16世紀末に戦乱による被害を受け、17世紀以降後補（再建）されたと考えられてきた。しかし、筆者が考察を行った結果、七星神に限っては、それらを交代するなどの修理は確認できなかった。その代わり、七星神を刻む部材について、17世紀以降の修理時に上下や左右が切り取られたことが確認できた。これは部材の年代が16世紀末の被害以前から統一新羅時代まで遡ると判断できる極めて重要な手掛かりになる。

通度寺七星神は、正方形の部材に浮彫されたものが多く、類似した図像が同規模の部材に浮彫されたもので統一新羅の八部衆や、舍利塔などの十二支もあることから、統一新羅まで遡る可能性は十分に想定できる。さらに、7世紀創建の通度寺戒壇の七星神は、八部衆と十二支とともに四天王の眷属として、石塔において方角を司る守護尊であることから、同図像が統一新羅の八部衆や十二支などの守護尊に影響を与えた可能性が大いに推察できる。

通度寺七星神のような図像は、中国や日本においても七星神（二十八宿）が雲座に座すなどの一部類似するものが見られる。今後、これらの図像とその年代関係についても研究していきたい。

注

- 1) 李能和『朝鮮仏教通史下』新文館, 1918, p. 150; 蔡澤洙『新羅仏教戒律思想研究』国書刊行会, 1977, pp. 263-271; 通度寺『通度寺大雄殿呉舍利塔実測調査報告書』1997; 高壽永「金山寺方等戒壇에 대한考察」『靑藍史學』3, 2000; 박언근이재인최효식「韓国仏教寺院의戒壇과『戒壇図経』의比較研究」『建築歴史研究』第16巻2号(通巻51)2007, pp. 99-118; 이경화「中国唐道宣의戒壇과金山寺戒壇」『歴史学研究』35, 2009; 여이숙「戒壇型僧塔研究——戒壇型僧塔의出現과再現——」『美術史学研究』275276, 2012, pp. 61-88; 최태선「金山寺戒壇方等戒壇의価値와位相」『仏教思想과文化』8, 2016, pp. 157-191; 韓政鎬김지현「通度寺戒壇金剛戒壇의變遷과浮彫像의図像考察」東国大学校新羅文化研究所『新羅文化』50, 2017, pp. 213-244; 沈盈伸「通度寺金剛戒壇石造神將立像의造形과編年」『仏教美術史学』25, 2018, pp. 127-157; 拙稿「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図経』」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第十六号論集新羅仏教の思想と文化——奈良仏教への射程——』GBS 実行委員会, 2018, pp. 33-53 など。横超慧日氏(「戒壇について中」『支那仏教史学』第五巻第二号, 1941, pp. 32-56)や, 村田治郎氏(「戒壇小考」『仏教芸術』50, 毎日新聞社, 1962)は, 年代の齟齬から通度寺戒壇の創建を『戒壇図経』成立以降とする可能性を提示する。張忠植氏も同経との法量・構造の共通点を指摘しながらも, 通度寺戒壇が先行することから懐疑的な立場だったが(「韓国石造戒壇考」『仏教美術』4, 1979), 後に同経の影響を認めた「韓国仏舎利信仰과그莊嚴」『仏教美術史学』1, 2003, pp. 7-26。
- 2) 上層基壇のみを七星神とする解釈もある(注1 韓政鎬김지현「通度寺戒壇金剛戒壇의變遷과浮彫像의図像考察」, 前掲)。しかし, 通度寺戒壇に基づいている『戒壇図経』では七星神が兩層(上下)基壇に配されるとあり, 「康熙乙酉重修記」(1705年)中でも同様に「四面上下三級七星分坐」とし, 現状においても下層基壇四面に7体ずつ安置されている。また, 上下基壇四面には同様の七星神が繰り返して安置されていることが指摘される(拙稿「通度寺戒壇の基壇部の考察」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』41, 2019, pp. 1-23)。
- 3) 守護尊の詳細については注1 拙稿「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図経』」, 前掲; 注2 拙稿「通度寺戒壇の基壇部の考察」, 前掲を参照して頂きたい。
- 4) 注1 通度寺『通度寺大雄殿呉舍利塔実測調査報告書』, 前掲; 注1 韓政鎬김지현「通度寺戒壇金剛戒壇의變遷과浮彫像의図像考察」, 前掲; 注1 沈盈伸「通度寺金剛戒壇石造神將立像의造形과編年」, 前掲; 注1 拙稿「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図経』」, 前掲; 注2 拙稿「通度寺戒壇の基壇部の考察」, 前掲。
- 5) 洪武十二年己未秋八月廿又四日。南山宗通度寺住持圓通無礙辯智大師沙門臣月松。奉其寺歷代所藏慈藏入中國。所得釋迦如來頂骨一舍利四。毗羅金點袈娑一。菩提樹葉若干至京。(中略)歲丁巳四月。倭賊來。其意欲得舍利也。窖之深。又恐其掘發也。負之而走。今年閏五月十五日。賊又來。其意欲得舍利也。窖之深。又恐其掘發也。負之而走。
- 6) 注1 通度寺『通度寺大雄殿呉舍利塔実測調査報告書』, 前掲; 注1 韓政鎬김지현「通度寺戒壇金剛戒壇의變遷과浮彫像의図像考察」, 前掲; 注1 沈盈伸「通度寺金剛戒壇石造神將立像의造形과編年」, 前掲。
- 7) 通度寺神僧慈藏古所安釋迦世尊金骨舍利浮圖。(中層)萬曆二十年日本海兵入國。(中略)浮圖其實將爲散失。悶鬱之際適義僧大將惟政領兵數千盡心守護得完全然。政不無後慮故以金骨舍利二函。(中略)病老竊念金剛近水路後必有此患安金剛非長久計也。(中略)然則不若寧修古基而安焉云即以一函還付于政政然其計受函即還古基而安鍾焉。其一函則病老自受持謹入太白山欲建浮圖。
- 8) 韓国学文献研究所『通度寺誌』(『韓国寺誌叢書』5) 亜細亜文化社, 1979, p. 88。

- 9) 注8 韓国学文献研究所『通度寺誌』, 前掲。
- 10) 通度寺舊有金剛戒壇安釋迦世尊靈骨舍利浮圖。我聖上三十年甲申性能大師謀於衆曰有而佛無而佛寶顧今鐘泐。而壇缺無顯刻非所以尊之也。(中略) 今日之事亦惟師於是早夜以圖易其泐而增治其缺 (中略)。洪武十年丁巳海寇入梁州規取舍利。月松大師嘗之尋負而走追之急天且黑雨作乃得脫。語具牧隱李先生記中越萬曆二十年。我宣廟壬辰海寇大入嶺以南實先受兵虔劉而焚劫之者雖戒壇不得免焉會四溟大師惟政以義僧將至力完。之慮有後敗密盛以大小二函使遺休靜師于金剛山。靜策曰豈以南爲迫於賊耶茲。山亦東並海非萬全之所。(中略) 舊壇而修之便遂以一函還政。既而曰葛盤太白山昭其靈也其忽諸乃命二門人奉其一函。(中略) 萬曆壬辰兵亂之餘松雲大老誌事焉。順治淨仁師重完。而康熙乙酉春性能 (中略) 聖骨濫奉瞻禮修寶壇。
- 11) 注1 韓政鎬김지현 「通度寺戒壇金剛戒壇의 變遷斗浮彫像의 圖像考察」, 前掲; 注1 沈盈伸 「通度寺金剛戒壇石造神將立像의 造形斗編年」, 前掲。
- 12) 第二層上四角大神。所謂四天王也。東北角天王名提頭賴吒。領乾闥婆及毘舍闍衆。(中略) 東南角天王名毘婁勒叉。領鳩槃荼及薛荔多衆。(中略) 西南角天王名毘婁博叉。領諸龍及富多羅衆。(中略) 西北角天王名毘沙門。領夜叉及羅刹衆。(中略) 依賢愚經。此等鬼神皆名夜叉。形色青黑。眼赤如血。鉤牙上出。頭髮悉豎。火從口出。經雖如此。及論顯相。義須別態。不可一像 (大正 809c-810a)。
- 13) 四天王所部諸神隨名便配。(中略) 且存前數。何由可盡其數量也。兩層色道內龕窟中神。經中大多。今依孔雀王經。明七星神。依方守護。其上層中安窟既少。可列七星神。配坐窟中。然二十八星神出沒增減。(中略) 東方七星神名。基栗底柯一。虜喜尼二。麋梨伽尸羅三。阿陀羅四。不捺那婆脩五。弗沙六。阿沙離沙七。南方七星神名。(中略) 西方七星神名。(中略) 北方七星神名 (大正 45.810a)。
- 14) 大正 45.809a。
- 15) 大正 13.371a-b。
- 16) 大正 13.342c-343a。
- 17) 注2 拙稿 「通度寺戒壇の基壇部の考察」, 前掲。
- 18) 注8 韓国学文献研究所『通度寺誌』, 前掲, p. 98。
- 19) 注1 拙稿 「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図經』」, 前掲。
- 20) 注2 拙稿 「通度寺戒壇の基壇部の考察」, 前掲。
- 21) 注1 沈盈伸 「通度寺金剛戒壇石造神將立像의 造形斗編年」, 前掲。
- 22) 注2 拙稿 「通度寺戒壇の基壇部の考察」, 前掲。
- 23) 通度寺者凡兩函函各二顆。萬曆壬辰之難賊毀塔。(中略) 移奉於毘瑟山之龍淵寺後大衆相與謀設塔藏之。又思其有? 乎兩師之遺意奉一顆還安於通度留一顆安于龍淵。
- 24) 同様式を見せる朝鮮時代の戒壇四隅の守護尊は、17世紀後半ごろに建立された完州・安心寺戒壇においても見られる。
- 25) 戒壇の隣に立つ石塔の舍利莊嚴具から発見された「右塔昔書載録。大平興国四年 (979) 起始。大平興国七年 (982) 壬午畢造」という銘文より、戒壇は石塔とともに982年頃の建立とされてきた (文化公報部文化財管理局『金山寺実測調査報告書』1987など)。しかし、最近の研究で同戒壇は7世紀末以降の建立とする見解も提示されている (拙稿「金山寺戒壇の舍利塔と年代」『COSMICA』49, 2020, pp. 39-55)。
- 26) 水谷正義編訳「高麗仏日寺の調査・研究——近年の共和国の研究報告書から——」『朝鮮学報』113, 1984, pp. 97-136。
- 27) 詳細は、拙稿「開城・仏日寺戒壇の意義」『龍谷大学佛教学研究年報』25, 2021を参照。
- 28) 殷光明『北涼石塔研究』覚風仏教芸術文化基金会, 2000, p. 26を参照。
- 29) 四天王の邪鬼を除く統一新羅の夜叉形の守護尊の作例には、大邱・慶北大学の毘盧遮那仏台

- 座の雲座に座す守護尊，慶州・東国大学校博物館の夜叉像（石塔部材か），慶州・七仏庵の夜叉像（石塔部材か），報恩・法住寺の夜叉形の奉鉢石人像などが挙げられる。
- 30) 四天王寺塔基壇の守護尊については注1 拙稿「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図経』」，前掲を参照。
- 31) 詳細については，拙稿「感恩寺址東西塔舍利容器の内函の考察」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』42，2020，pp. 1-20を参照。
- 32) 拙稿「蔚山・大和寺址十二支舍利塔」『龍谷大学仏教学研究年報』24，2020，pp. 65-82（本稿の82ページの戒壇復元図は，蔚山博物館『蔚山博物館特選遺物歴史編古代1』2015によることを明記しておく）。
- 33) この図像については，注32 拙稿「蔚山・大和寺址十二支舍利塔」，前掲において，海や山のようなものの上に立つと指摘した。しかし，十二神将や十二支との関わりが確認された，国立慶州博物館・東国大学校博物館の6体（拙稿「統一新羅の十二神将に関する考察」『フィロカリア』33，2016，pp. 85-107）と，最近これらと一具であることが確認された梨花女子大学校博物館の1体は，石塔基壇面石として立像で雲座に立つことから，大和寺址十二支舍利塔の十二支像が立っているのは「雲座」と訂正する。
- 34) 拙稿「遠願寺址石塔の四天王像・十二支像」『京都外国語大学研究論叢』94，2020，pp. 63-80。
- 35) 拙稿「統一新羅時代の十二神将像：韓国と日本の十二神将像の比較研究の一環として」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』34，2012，pp. 69-86。

〈図版出典一覧〉

- 図2-1，3-1，4-1，5-1 通度寺『通度寺大雄殿呉舍利塔実測調査報告書』1997
- 図7 高麗美術館『高麗美術館藏品図録』2003
- 図8-3 www.donghwasa.net/?c=7/268/237&uid=2575&PHPSESSID（2021年1月12日）
- 図10 www.beopbo.com/news/articleView.html?idxno=101299（2021年1月12日）
- 図12 蔚山博物館『蔚山博物館特選遺物歴史編古代1』2015

